

主の2015年12月13日
第90号 クリスマス号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
 牧師 松永政和
 ☎590-0114
 堺市南区槇塚台1-1-5
 TEL/FAX 072-291-9532
 メール izumigaoka9532church@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前10時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリア会・テモテ会、他

■ 教会標語 ■

『キリストを証する教会』
—手を携えて歩む—

「教会に行ったことありますか」。キリストの教会は、幼子からお年寄りまで、年齢を越え、性別を越え、生きてきた環境も違う人たちが一緒になって一つのことをします。それは、神さまを礼拝するということです。いつもは、子どもは子どもたちで、大人は大人たちで礼拝を守っています。でも時々みんなと一緒に礼拝を守ります。今日、クリスマスの礼拝もその一つです。

礼拝では、神さまをたたえる讃美歌を歌います。みんなでお祈りをします。聖書を読みます。聖書は、神さまのこと、神さまが私たちに何をしてくださっているかが書かれています。みんなのよく知っているイエス様のお言葉が書かれています。そ



光のこども

牧師 松永 政和

のお言葉を分りやすく話してくれる牧師(ほくし)がいます。今日の話は、私たち子どもにも分りやすいお話です。イエス様のお誕生をお祝いするクリスマスのお話です。

みなさんはイエス様がどこでお生まれになったか知っていますか。イエス様は、立派な病院で、やさしい看護師さんたちに見守られながら生まれたのでしょうか。それとも暖かいお家で、家族の人に見守られながらお生まれになられたのでしょうか。いいえそうではありません。それどころか誰も嫌がるような、冷たくて暗い、馬小屋の中で、うるさく鳴く牛や羊たち家畜のいる中でお生まれになったのです。それも家畜が食べるエサを入れる「かいばおけ」

の中でです。
イエス様は「おぎゃ、おぎゃ」と泣いている赤ちゃんです。それはどこにでもいる赤ん坊、私たちと同じ人間としてお生まれになりました。「この子が神さまのひとり子」だなんて、誰も知りませんし信じもしません。でも本当なのです。神さまは、私たちが救うためにもう誰も起きていない暗い夜中に、一人の赤ん坊イエスとしてお生まれになりましたので、悲しいこと、苦しいこと、辛いこと



の多いこの暗い世界を照らす光と
なって来られました。私たちはまだ
気づいていませんがこのイエス様こ
そが光です。この光に照らされます
と、どんなに暗い所でも、いっぺん
に明るくなります。そこに何がある
のかははっきりと分ります。この光に
照らされて隠れることはできません。
私たちは、大切な約束を破ること
があります。お父さんやお母さんと
した約束、友達との約束です。意地
悪をすることがあります。悪口を言
います。嘘をついたりすることもあ
ります。時々、友達とけんかをする
ことがあります。大人の人もけんか
をしています。もっと大きく、国と
国とがけんかし争っています。自分
の方が正しくて相手が悪いんだと責
め合っています。そして神さまのこ
とをすっかり忘れていきます。
イエス様はそのようなことを全部
照らし出す光です。イエス様という
光が、いろいろなことを考えている
私たちの心の中を照らします。
そこである人は「そんなのいやだ」と
言っていて光から逃げていきます。光
の届かないところに行こうとします。
またある人は、この光に照らされて、

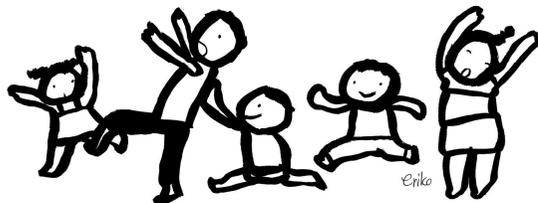
では、私たちは、どうでしょうか。
「自分がまちがっている。悪いこと
をした」と思ったとき、神さまに「ご
めんなさい」と、すなおにお祈りす
るでしょうか。私たちが知っている
賛美歌にこんなのがあります。「ひ
かり、ひかり、わたくしたちは ひ
かりのこども。ひかりのよこし」。
そう、私たちは光の子どもです。そ
れはイエス様の子どもだということ
です。賛美歌は歌います。イエス様
を好きな子供は明るい子ども。イエ
ス様がいつも見ておられ、私たちを
明るくしてくれる。そして光の子供
は元気な子供。それだけではありま
せん。イエス様の子どもは正しい子



始めて自分が持っているいろいろな
悪い考えや、行いが見えてきてビッ
クリします。神さまに「ゆるしてく
ださい」とお祈りします。そしてこ
の光がいつも自分を照らしていてほ
しい、イエス様がいつもいてほしい、
と願います。

どもです。イエス様の光に照らされて、イエス様のお言葉を聞いて、良いことと、悪いことを見分けることができるようになった子どもです。悪いことから遠ざかり、良いことに近づこうとします。私たちは光の子どもです。幼い子どもも、年月を重ねた人たちも、みんなイエス様の前では光の子どもです。

イエス様は朝の太陽。夜、何も見えなかったものが、突然なにもかもはつきりと見えてくる朝の太陽のようです。私たちを、友だちを、お家の人、町を歩いている人たち、それ



に遠くの国の人たち、みんなを照らす光です。その光がいま、私たちのそばで輝いています。それは決して消えることのない光です。夜でも、一人で淋しくしているときでも、悲しいときも、嬉しいときも、いつも私たちの上に輝いています。

今日は、その光であるイエス様がお生まれになられた日。私たち人間と同じような赤ちゃんの姿になってお生まれになられた嬉しい日です、神の御子イエス、私たちの救い主イエス・キリストのお誕生日。メリークリスマスです。 Ω



新しい気持ちで

夏目 美知子



十一月二十九日、待降節を迎えた。諸集会はその準備の日の日程表、案内のカード、聖書日課などが用意され、しばらく教会生活を離れていた私は、それを新鮮に感じると共に、泉ヶ丘教会のクリスマスがどんな様子なのだろうかと少し緊張も憶えた。

子供の頃のクリスマスは、きれいな飾りつけや皆で演じる降誕劇、教会学校の先生達からの手作りのプレゼントがあつて、大人はいつも以上にニコニコしているし、ただただ楽しかった。小学校は岡山と小樽で、中学は札幌で、高校は福岡と大阪でと過ごしたが、子供時代は何処でも同じだったように思う。

変わったのは、一九七〇年一二月二〇日、東京で迎えた学生生活最後

のクリスマスからだ。それまで迷ってばかりいた私は、その日によく受洗。そこから「クリスマスおめでとう」とは言うけれど、実はそれがキリストの十字架の苦しみのスタートなのだというのを遅ればせながら考えるようになった。家庭を持って子供を育てる間も、所詮世間で言うクリスマスとは違うのだという事を感じ取って欲しいという願いがあった、我が家では教会の礼拝に出席するのみのクリスマスチャンであった。聖日礼拝で告白する使徒信条の「主は聖霊によりてやどり」から始まるセンテンスはとても長い。けれど幾つもの経過を述べつつ、リズムミカルで、しかも一氣に言えて、なんと過不足ない表現なのだと感心する。その中の「乙女マリヤより生まれ」というのが、クリスマス。それは直ぐ「ポンテオピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」に続く。きつと、私が長い間教会での礼拝を離れていたからなのだろう、ここを唱える時、キリストの誕生の目的というものがひどく胸に堪える。今回戴いた「聖書日課」を開いても、待降節にも拘わらず、やはり、誕生の

ことより、そこから先のキリストの受難について多く書かれているように思う。

クリスマスは、私の受洗記念日でもある。受洗を決意したのは、直前のように「今しかない」と思って、そのまま牧師の所に向かった。その時の自分の気持ちを今でも忘れていない。そして、それは、泉ヶ丘教会に転入会しようと決めた瞬間の思いと重なる。私の中でこの二つはとも似ている。

初めて泉ヶ丘教会で迎えるクリスマス。様々な事に思いを巡らしながら、教会員の皆さんと共に、待降節を過ごしたいと思う。



妹との初旅行

野々下 陽子

義理の妹と二人でシンガポールに旅をした。お互い大阪に住んでいて、家族同士で食事を共にしたり一緒に観劇に行ったりすることは何度かあったけれど旅は初めて。話の始まりはこの夏、「お互い子どもたちも成長したし、そろそろ一度どこかに旅行しないか」という会話から妹が計画を立て全て手配してくれた。夫婦、親子以外で何日間も同じ部屋で過ごす旅行をするのは初めてなのでちょっと緊張していた。体力的にも朝から晩まで行動する自信が無いので、飛行機とホテルだけを推さえ、二つ三つ行ってみたい場所を決めて

他はその日の体調によって柔軟に行動しよう、とゆるいスケジュールのんびり旅の計画にもらった。行き先のシンガポールにはダイアナさんという妹の数十年来の友人が住んでいて、妹は彼女との再会も楽しみにし、私も初めての二人旅、妹に「言葉（英語）は頼みます、私はMちゃんに頼りっぱなしになると思っけど許してね、色々よろしくお願ひします。」とアクティブ、ポジティブな妹に大方お任せという甘えの気持ちで出発を迎えた。

日曜日の夜、夕飯を済ませ留守を家族に頼んで日本を発ち、翌朝シンガポールに着いた。朝5時半、飛行機を降りると、気温と湿度が高くて南の国にやって来たのを肌と感じた。ダイアナさんが空港で迎えてくれて、お久しぶりと初めましての挨拶を交わしてホテルに向かい、チェックインカウンターでダイアナさんの助けもあってかアーリーチェックインが出来て朝早くから部屋に入ることが出来たので、荷物を置いて静かな空間で寛げて寝不足の体にはとても有り難かった。部屋に入って一息ついて、ダイアナさんの「今日はこれか



らどうする？どこに行きたい？何が食べたい？私今日仕事は無いから一緒に行動できるわよ」の言葉に、私達の考えを伝えると、「じゃあ、こうしたら良いかな、こんなのはどうか」と一緒に大まかな計画を立ててくれて、まずはホテル近くの植物園を散策、電車でリトルインディア

という地区に行き、街を歩いて回った。その翌日がディパバリというヒンズー教の新年の祝日とのこと、街は賑やか、新年準備の為の買い物客で大混雑、光のお祭りと言うことでメイン道路は色鮮やかな花模様の電飾が両側からアーチ状に飾られ、それがトンネルのように延々と続いていてお祝いムードを盛り上げていた。一旦夕方ホテルで休憩してから、夜には再びダイアナさん家族、彼女のお姉さん家族、ご両親と弟さんとおぼ一族揃って、ホーカーズという屋台の集まったフードコートに行っいろいろな種類のシンガポール料理を味わい、家族皆と一緒に心地よい空気の流れる中で嬉しい時間を過ごしてホテルに帰った。翌日の祝日は、ダイアナさんのお姉さんご主人が運転手をしてくれ、ダイアナさん夫婦と一緒に百年程前のシンガポールのレトロな街並みの残る地区に案内してくれた。そこはイギリス統治を受けた影響のヨーロッパを思わせる物とアジアがミックスされたパステル色の建物が保存されている静かな住宅街だった。多民族国家のシンガポールには、其々の民族と宗教の新



年やお祝いの日が祝日に制定されているとのことで、ディパバリの次はクリスマス、そしてチャイニーズニューイヤーが来て、その後にはムスリムの祝日と続いて行くとダイアナさんのご主人が教えてくれた。ダイアナさんと妹と私はほぼ年齢も一緒、女子三人スマホで写真撮り合いながらおしゃべりして笑ってあちこち歩き回り、男性一人もいろいろ気を遣ってくれその日も夜までお世話になり、休日の時間を捧げてくれたダイアナさん家族に感謝して眠った。

次の日は二人でマレーシアへ半日ツアーに参加、数時間だけのお付き合いだったが東京からの母娘さんペア、茨城の銀行員のお嬢さん二人組とランチの席で会話を楽しみ、ガイ

ドさんからは、シンガポールがマレーシアから独立して今年五十年、二国間で段々格差が出来て、今のマレーシアの貨幣価値はシンガポールの三分の一になっていること、マレーシアの国境からシンガポールへ数百台の通勤用のバス、また通学用のバスが毎朝夕行き来しているお国事情も知った。

電車もよく利用した。ダイアナさんがチャージしてくれたICカードを使って、わかり易く路線も整備されたMRTという電車は移動に便利だった。治安も安全で、リトルインディア、チャイナタウン、アラブストリートなどそれぞれ特色ある場所を訪れて、其々のミニチュア国に居るような感覚を楽しみ、インドの植物由来の石鹸やスパイス、薬膳に使う食材、シンガポール料理の素などダイアナさんに助けてもらいながら探して買い物をしたのも嬉しい思い出の一つになった。また、電車内や街でシンガポールに暮らす人々を多く見て、「皆自分のファッションを持っていて人の目を気にすることなく自然で堂々としているのが良いねえ」と妹と二人で同じ事を感じた。



日本で子育てした母親の視点がそのように感じさせたのかもしれないけれど、自分の存在がそのままオッケイなように他の人をも同様にオッケイと見る、色々な民族で違う文化を持つ人たちが共に暮らすこの小さな国の特徴をちょっとだけ見た気がした。

旅の最終日、ダイアナさん夫婦とお姉さん、そしてご両親が空港に見

送りにきてくれた。お母さんは「私の英語はあまり上手じゃないの」と言ってニコニコ、お父さんもずっとニコニコされておしゃべりすることはあまりなかったけれど、温かい家族の様子が伝わってきた。私の英語力が貧弱すぎて上手く御礼を言うことが出来なかったのが申し訳なかったけれど、本当に最初から最後までお世話になり感謝だった。

今回の妹との貴重な時間、料理をシェアし合って美味しいねと二人で笑顔し、夜ベッドに入ってからゆっくりに家族の事など色々な話をして毎日穏やかに床に着いた。妹のタイプは「動」で私は自分で思うには「静」、感性もずいぶん違う二人だけれど、朝に晩に「神様感謝ですー」と言う妹の素直な信仰を見て、その笑顔に「ほんとだねー」と私も喜びを共に味わえて、行く前には思ってもいなかった事がたくさんあって中身の濃い旅が出来た。

家に帰って来て、お土産に買ってきた食材を使って現地で食べた料理を幾つか再現してみた。家族に好評な物、薬味が強すぎてそのままではあまりたくさん食べられない物も

あったけれど、それは翌日リメイクしてカレーに変身し美味しく完成した。

何より、旅の間、留守番をしてくれた家族や各自の生活場所で暮らす家族一人一人が守られて、私達も毎日色々な事が整えられて出来た旅だったことを神様に感謝します。家族の皆、ありがとうね。 Ω



近畿青年交流キャンプ

辻 光



私は初めて近畿青年交流キャンプに参加させて頂きました。今年度のテーマは「聖霊」と題して始まりました。初参加と言う事もあって多少戸惑いもありましたが、青年交流キャンプのスタッフでもある辺見かおりさんの助けもありなんとか場に馴染む事が出来ました。

お説教では広島県呉市にあります呉平安教会の小林克哉牧師の聖霊についての講演が難しかったです、その分解らないままではありましたがとてもためになりました。分団ではそのお説教の内容をまた一から皆で話し合いまとめると言う作業をしてくれました。色々な他教会の方とも親しくさせて頂きました。 Ω

最後にはなりますが、また来年も出来れば参加したいと思っています。 Ω



讃美歌

長澤 真理

クリスマスが来るたびに歌われる讃美歌。もう何十回弾き、歌っただろう。毎回ワクワクするけれど、心から主を待ち望んでのワクワクだろうか？それともご馳走やプレゼントを待ち望んでのワクワクか？

主の日の礼拝の讃美歌は私達の教会では(多くの教会も)斉唱です。会衆が心を一つにして主を賛美する。

なかなか音に合わせるのが難しい人、大きな声は出せない人、歌う体力の無い人、様々おられます。でも心を合わせることはできます。言葉をよく味わい、音にならなくても口を動かして欲しいです。

注意しなければならぬのは、むしろ歌うことが好きだったり、自信のある人です。もちろん美しい声を与えられ、力強く歌える体力を与えられていることは感謝ですし、人々に喜びを与えます。でも主を賛美していることを忘れやすいのです。

正教会の礼拝では楽器を使用していませんでした。その代わりというか、聖職者には歌のテストがあると聞きました。ロシアの神学校で讃美歌を聞きましたが、素晴らしかったです。主に良いものを捧げるためには訓練も必要ですね。

ドイツでイブ礼拝に出席した時、トランペットの演奏で始まり驚きました。何百年の歴史ある大きな古い教会堂の響きは素晴らしく天に確かに届いていました。教会には聖歌隊とトランペット隊(主にお爺さんとおじさん)がありました。空気が乾燥しているせいもあり、楽器も声も

綺麗に響きます。礼拝の讃美歌はコーラルで落ち着いた感じ、節が多いので今日は、1節、4節、9節というふうに変更され、全部は歌いませぬ。覚えてる人が多いようでした。

手を叩け、歌とリズムで神を讃めよ。彼は全世界の主なのだから。

我らの神を賛美せよ
我らの主を賛美せよ。

彼は我らに喜びと笑いと幸福を与えてくださる。

そう、彼がどんなに私たちを愛してくださっているかを知らせて下さる。

(詩篇47篇より) Ω





祈ることの大切さを
子供たちに

村田 幸子

今年も教会のクララツに4本のろうそくが、一本ずつ立てられていく。そして4本目にはクリスマス。

12月12日土曜日、クリスマスコンサートを開催する。「クリスマスって何の日か知ってる？」と子供たちに訊くと、いつも「サンタさんからプレゼントをもらえる日」と答えが返ってくる。そのたびに「イエス様がお生まれになった日。だから感謝して過ごさなければいけない日。」と教えます。今年のコンサートで、私は特に子供たちに祈る大切さを教えることを、歌で教えました。

写真活動を通してあるネパール人に会う機会が与えられ、大地震の被害から立ち直れないでいるネパールの東部エヴェレスト地方、ファプル村の被害を知りました。その他にもいろいろな苦しみを抱えている人たちもいるこの世界です。クリスマスを迎える日だけでも、あったかい気持ちで持てる事が出来るように、私たちにできることは、祈ることしかない、祈ってもなんにも返ってこないと思う子供たちに、「祈りはあなたへの返事を待つのではない、信じていること」と教えます。このことが子供たちにしっかりと伝わるかどうかは分かりません。でも今年のクリスマスに教えられたことが、いつか大人になった時に気が付いて、神様に出会うことの日が来てほしいと私は祈ります。

教会に無縁の家族の中で育てられている子供たちも、どこかで神様の言葉を聞くチャンスを与えられる自由と恵みがある、それがクリスマスだと思っております。

「やすかれ、わがこころよ」と歌う私の合唱団、そしてフィナーレは、”For the beauty of the earth”と神様の御業に感謝し、褒め称えて歌います。

この日だけは、苦しみの中にある恵まれない人たちに、いっぱいのお愛が与えられることを、子供たちとともに祈ります。

Very Merry Christmas !!

Ω





母への手紙 米寿祝いに添えて

岸本 眞

もう、半年も前の話になります。この教会の教会員だった母さゆりが北海道の姉のところに移り住んで以来随分と経ちましたが、その母が八八歳を迎えたのを機に家族全員が母の米寿のお祝いに北海道に集まり、彼の地で感謝の礼拝を捧げ、お祝いの会をしました。これはその時に母に贈った家族からの手紙の一部ですが、母が愛読していたこのマナで紹介させて頂き、私たち家族の信仰の証とさせて頂きたいと思います。

* * *

野の百合の、米寿の恵みに添えて
主の二〇一五年七月一日余市にて

ユリはキリストの復活の象徴とされる花です。ユリはさゆりさんの誕生日である三月三日の頃の春に咲きますが、キリスト教初期の芸術ではユリはその形や白さから純潔(Purity)のシンボルとされてきました。今日ではユリは身近な花ですが、世界史の中で装飾や象徴としてとても高貴な花として扱われました。例えば、中世フランスやイタリアのフィレンツェでは三つのユリ(信仰・希望・愛を表している)をデザインした紋章が使われており、今でもバッグなどの模様としてお馴染みです。「ユリ」(Lily)という名前は、大きな花が揺り動く様子からつけられました。「Lilium」という属名は、マドンナ・リリー(イエス様の母マリア)を指すラテン古名であるケルト語で「白い」を意味する「Lil」と「花」を意味する「Lium」に由来するそうです。

らでしようか。ユリは純潔のシンボルとして、結婚式を飾り、花嫁・花婿を祝福してくれます。ユリの花は、旧約聖書では雅歌(「か」)などで、イエス様をユリにたとえて予言しています。

「わたしはシャロンのばら、野のゆり。おとめたちの中にいるわたしの恋人は茨の中に咲きいでたゆりの花。」(雅歌2・1~2)

す。賛美歌四九六番にも歌われています。

うるわしの白百合 ささやきぬ昔を
イエス君の墓よりいでまし昔を
うるわしの白百合 ささやきぬ昔を
百合の花ゆりの花、 ささやきぬ昔を
春に会う花百合 夢路よりめさめて
かぎりなき命に 咲きいする姿よ
うるわしの白百合 ささやきぬ昔を
百合の花ゆりの花、 ささやきぬ昔を
冬枯れのさまより 百合白き花野に、
いとし子を御神は 覚ましたもう今
なお。
うるわしの白百合 ささやきぬ昔を

百合の花ゆりの花、ささやきぬ昔を



「さゆり」という名は、このよう
な名前の由来の背景もあった上で、
さゆりさんの父（私たちの祖父母で
堺教会の創立時教会員）である石本
熊造と母の光枝が、自分たち夫婦が
愛すべき三人姉妹の末娘であるさゆ
りへと継承すべき、救い主である主
イエス・キリストへの信仰の確信に
基づいて付けた名前なのでしょう。
私たちの父母である春雄とさゆりも
同じように、自分たちの信仰に基づ
いて、初代の堺教会牧師であった齋
藤敏夫先生にお願ひして聖書から引
用してもらい、名付けてもらった名
前のようですね。

岸本家は父春雄亡き後、貧しい母

子家庭の時代を経ましたが、私たち
の思いを超えた神様の計り知れない
恵みと共に、本当にたくさん人の
愛の支援を受けてここまで暮らして
くれました。そのことはこれからも
同じだと思い、さゆりさんの米寿の
お祝いのこのときに、再び今までの
多くの方々の支えを振り返り、親族
一同でそれらの方々に、そしてこの
家庭を祝福し続けて下さる神様へ、
感謝するときとしたいと思います。

「だから、言うておく。自分の命
のことで何を食べようか何を飲む
かと、また自分の体のことで何を着
ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よ
りも大切であり、体は衣服よりも大
切ではないか。空の鳥をよく見なさい。
種も蒔かず、刈り入れもせず、
倉に納めもしない。だが、あなたが
たの天の父は鳥を養ってくださる。
あなたがたは、鳥よりも価値あるも
のではないか。あなたがたのうちだ
れが、思ひ悩んだからといって、寿
命をわずかでも延ばすことができよ
うか。なぜ、衣服のことで思ひ悩む
のか。野の花がどのように育つのか、
注意して見なさい。働きもせず、紡

ぎもしない。しかし、言うておく。
栄華を極めたソロモンでさえ、この
花の一つほどにも着飾ってはいな
かった。今日は生えていて、明日は
炉に投げ込まれる野の草でさえ、神
はこのように装ってくださる。まし
て、あなたがたにはなおさらのこと
ではないか、信仰の薄い者たちよ。
だから、『何を食べようか』『何を飲
もうか』『何を着ようか』と
思ひ悩むな。それはみな、異邦人が
切に求めているものだ。あなたがた
の天の父は、これらのものがみなあ
なたがたに必要なことをご存じであ
る。何よりもまず、神の国と神の義
を求めなさい。そうすれば、これら
のものはみな加えて与えられる。だ
から、明日のことまで思ひ悩むな。
明日のことは明日自らが思ひ悩む。
その日の苦労は、その日だけで十分
である。』（マタイ6章25節、34節）

こどもたちからのお祝いメッセー
ジとして、私たち三人姉弟と弟夫妻、
そして私の妻と子供達から贈られた
メッセージのうち、クリスマスチャンデ
ある姉と私たち家族の祝辞が続きま
す。

○さゆり様、三人の子育てご苦労様でした。一番反抗して心配かけたのは私だと思います。その分最後のお世話ができるのを光栄に思います。おっかない娘ですが頑張ります。しっかり天国に送りますからね。(長女みくに・クリスマスチャン看護師)

○お母さん、米寿を迎えられおめでとうございます。お母さんと共に暮らした三原台での年月は、お母さんの八八年の歳月の四分の一にも及ばないものになりました。三原台では良いことも悪いこともありましたね。そして、謝らなければならぬことも伝えなければならぬことも、今頃になってようやく判かるんです。お母さん、あなたは優しいひとです。いっぱい赦してくださいあってありがとうございます。遠い地に在りましても、これからも主と共におだやかな生活を過ごされますように。(千登世)

そして最後に長男の私からの祝辞でこの葉を締めくくりました。

○それぞれに贈ってくれたメッセージにあるように、さゆりさんに対して、感謝や、後悔や、もっとしてあげ

たかったたくさん言い尽くせない思いのあることが、よくわかりますよね。こんな素敵な家族に恵まれて、あなたは本当に幸せな人生だったと、私もつくづく思います。最愛の夫の春雄さんに先立たれ、三人の小さな子どもたちの寝顔を見ながら、人知れず泣いたたくさん夜もあつたでしょう。けれども、神様はすべてを良しとして下さる全能の方であることを、このお祝いの会で確かめてくれればと思つて、この米寿の会をしました。愚痴も言ってみくに我が儘を言うのも仕方ないほど苦労をしてきたのでしようが、さゆりさんと同じように苦難の底に落とされたヨブが最後に祝福されたように、人生には必ず答えがあるのだと、そしてあなたは愛されるためにこの世に生まれてきたのだよと、主はさゆりさんの生涯を通じて語りかけて下さっているのだと、信じます。「行く先を知らないで」主の導かれるままに旅をしたアブラハムの妻サラは祝福されて一二七歳まで生きました。さゆりさんは行くべき先を神様から示してもらっていますよね。だからサラの齢まで祝福されて生きて、残

された生涯を毎日、感謝の祈りを恵みの神様に捧げながら暮らしてほしいと願っています。ここにメッセージを贈ってくれた誰よりも、あなたを苦しめ、あなたに愛された息子より。(長男、眞)

我が家の主人はキリストです。Ω



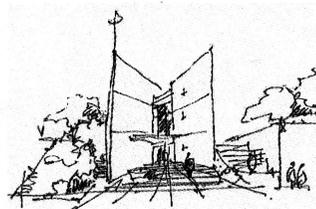
【寄稿】
 泉ヶ丘教会を生み出した親教会である堺教会から、森永長老がマナのために寄稿して下さいました。泉ヶ丘教会の信仰のルーツがここに記されています。

壮年会からはじまった

堺教会長老 森永 幸雄

今から四十年前前の堺教会は壮年会がとても盛んでした。

壮年会の委員は長老を除いて組織されていきました。長老は壮年会の一メンバーとして加わっていたにすぎません。そんな状況の中で、泉北ニュータウンの開発が話題となり、ま



堺教会壮年会 泉北ニュータウン見学
 1972年(昭和47年)5月

だ泉ヶ丘地区のみ開発中でしたが、壮年会の行事として、現地見学に行くことになったのでした。

泉ヶ丘駅近くの展望台に登り、その下で集会を持ちました。そしてやがてここに大きな町が出来る事を実感して、教会として開拓伝道の「まぼろし」が与えられたのです。このことはあとの長老会でとりあげられ

協議を重ねていくことになったので

す。
 数ヶ月後、榎塚台地区が整備され、売り出されることになりました。そこで長老全員で現地に行きました。榎塚台の交差点のところからずっと下まで一望出来ました。狭山方面へ続く道路と環状になる交差地(注・現在の茶山台一丁の交差点)のところです。敷地面積は(側面が広く小さく見えた)お隣は広く倍くらいありましたが、現在地を選択したので

す。
 そしてこの地を求めため、長老十六人中十名がこの地の購入をめざして指名申込みを行ったのです。もちろん私もその中に加わりました。そして当たったのは故・北井定太郎長老でした。北井さんはその時失業中でしたが奥様も信仰に燃えていた人でしたから、いろいろたいへんだったと思います。最も良い人に当たったのだと感謝でいっぱいでした。

開拓伝道用に堺教会の旧会堂跡地が処分され榎塚台の土地購入に生かされたのです。土地には二年以内に建物を作る事、十年間は転売しないことなど、さまざまな制約はありま



した。あくまでも個人の建物でありますのでそのように建てました。豊の部屋を二つにし襖を外せるようにして、西側は床面にして説教台、オルガンが置けるように、縁側も戸を外せるように、そして普通の民家に見えるように、玄関なども工夫されました。

建物が出来、牧師が常駐し、礼拝を行うようになったとき、「泉北方

面に住所のある方」には強い要請で横塚台の伝道所に移ってもらうことになりました。移られた方々は、大変な事だったろうと思います。よく不平も言わずに移って下さいました。そして三年位たってからでしょうか、「自由に行きたい人は、住所に関係なく行き、今まで伝道所に行っていた人も堺に戻ることが出来る」、これははじめからの約束ごとでしたが、実施されたのです。私の頭の中に浮かぶ顔はこの時五名位の方々がおられます。その中に小松原真紀さんがおられます。小松原さんは私の近所であり、家庭集会を私の所と月々交代で行っていましたので驚きました。「歳をとったらいつでも帰っておいで」とみんなから声をかけられていました。たえ礼拝の出席が困難になっても最後まで泉ヶ丘教会に籍は置くように私は勧めたのです。本人もそのつもりですとはっきり言われました。今、懐かしく思います。

堺教会からはこうして数人移って行かれましたが、泉ヶ丘から堺に来られる方は一人もおられません。これは本当に嬉しく勇気づけられました。



堺教会との合同長老会
2015年4月19日

泉ヶ丘教会に新会堂が建ったとき、本当に目を見張るものがありました。白くそびえる十字架が迫り、伝道の拠点としてこれからも活動されると確信しています。泉ヶ丘教会は先頃、教会創立三十周年を記念して大井尚牧師をお招きになり礼拝を持たれました。壮年会を指導し、泉北地区での伝道を志し、その実現へと向かわれた先生は、どんなにか喜び感じられた事でしょうか。泉ヶ丘教会の皆様



様には本当にありがたいと思っております。

堺教会は、泉ヶ丘教会の会堂が建てられ、その返済が済むまでは共に責任があると思つてやってきました。今、それも済み、新しい教会の交わりの関係にあると思います。振り返るとはじめに泉ヶ丘の展望台に登った壮年会のメンバーは、堺教会には二人くらいしかいないのです。時代はこんなに動いています。

この後、三十年、五十年経った時、今を語れる若者がいる事を願っています。

がん哲学外来

長老会報告

去る十月二五日に、泉ヶ丘教会秋の特別講演会「がん哲学外来―このときをどのように生きていくか」が、樋野興夫先生（順天堂大学医学部教授）をお招きして開かれました。

誰にでも訪れる死ですが、進行がんによつてその最期の時の訪れを宣告された方々は言葉を失います。この方々の苦悩に対して、がんそのものに対する闘病への医療的な支援を超えて、命より大切なものを見つめるために最も必要なことは何かを問ひ、そこに「みことばの処方箋」の支援の大切さを説かれました。この支援は、「がん哲外来カフェ」というがん当事者やご家族や支援者との語らいの場の提供として各地で広がっています。

樋野先生は、教会こそこの真の語らいの場となつてほしいと話され、参加された多くの聴衆の関心を集めました。

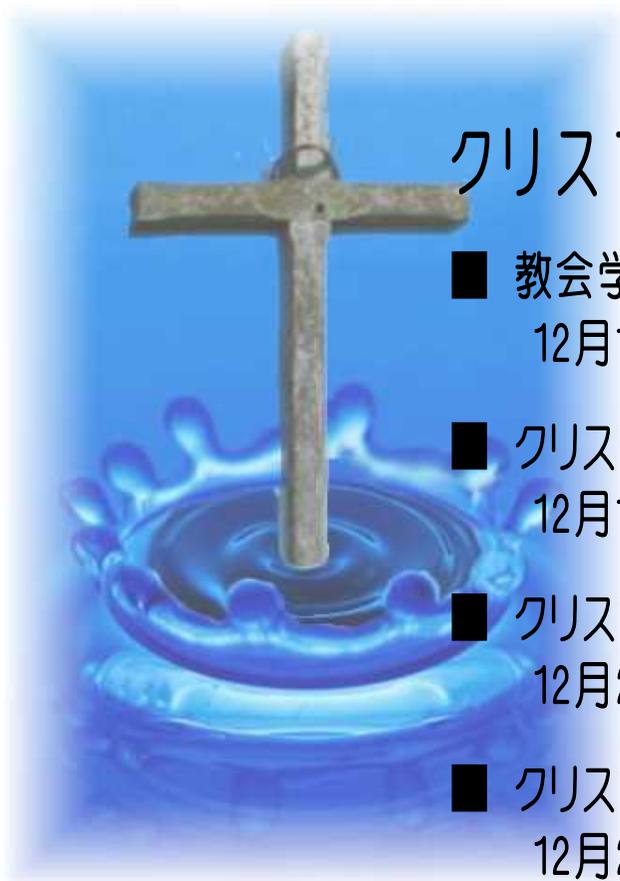
泉ヶ丘教会ではこの講演会を受け

て、死と対峙することに直面された方とそのご家族に対して、また高齢の後の人生の終焉のときを考える方々に対して、そして最愛のご家族を見送つた後の哀しみの中にある方々に対して、私たちの教会が信仰に基づいてできることは何かについて、後日に懇談の時間が持たれています。

この時代や社会にあつて、教会には神さまから求められている使命があります。毎週の礼拝で与えられるみ言葉から、私たちの命は神さまが与えられ、神さまが取り去られる真の愛の支配の中にあることの喜びと安心を信じる群れとして、祈り求め、歩み続ける教会でありたいと思ひます。神さまの恵みが注がれる教会へどうぞお越し下さい。一緒に主イエス様の御聖誕、クリスマスの喜びの礼拝をお捧げしましょう。



クリスマスは教会へ



クリスマスのご案内

- 教会学校 クリスマス会
12月12(土) 11時半~13時
- クリスマス ハンドベルコンサート
12月13(日) 14時~15時
- クリスマス タベの礼拝
12月24(木) 19時~20時
- クリスマス 記念礼拝
12月27(日) 10時半~12時
礼拝後 クリスマス祝会と聖誕劇

日本キリスト教団

泉ヶ丘教会

牧師 松永政和

堺市南区槇塚台 1-1-5

(田中歯科/くわ総合クリニック向)

お電話 072-291-9532

